20022

心カテ直後のシネ説明の是非について
患者の身体的ならびに精神的ストレスの比較・検討

[1]国立病院機構　浜田医療センター、[2]国立病院機構　浜田医療センター
小原　真知子[1]、塚本　慎一郎[1]、倉鋪　志子[1]、中山　睦夫[2]

【目的】経橈骨動脈アプローチが普及した結果、当院では心臓カテーテル検査・治療結果のシネ説明を手技直後にするスタイルが主流となっており、私たち医療者はこの説明時期で患者から満足が得られているものと認識していた。しかし、カテ後看護の際に患者から手技中の苦痛や穿刺部出血の不安に関する言葉が聞かれることがあり、身体的および精神的苦痛が残存する中での『シネ説明』は逆に患者にストレスを与えているのではないかと考えるようになった。そこで、『手技直後のシネ説明』が患者にとってストレスとなっている可能性について検証することとした。【方法】上肢から心臓カテーテル検査・治療を受けた全患者を、直後にシネ説明を受けた群(A 群)と受けなかった群(B 群)に無作為に分ける。帰室直後に STAI の不安尺度を用いて作成したアンケートと、手技中・後に感じている苦痛と思われる事象を抽出し、精神的・身体的ストレスの強さを評価する。このアンケートを集計し、A 群と B 群とのストレスに関する有意差を検定する。【結語・考察】心臓カテーテル検査・治療直後にシネ説明を受けた患者のうち、検査のみを行った患者群間では精神的・身体的ストレスに有意差は生じなかった。しかし、治療(PCI)を行った患者群間においては、身体的苦痛に関しては有意差がなかったが、STAI の不安尺度では治療直後にシネ説明を受けた患者群においてストレスが低い傾向にあった。今後は個々の患者背景に応じてシネ説明の時期を配慮する必要があることが強く示唆された。